

半分こした石焼き芋

浅雪ささめ

校庭のイチョウも黄色くなり、帰り道にある名前の分らない街路樹も赤く染まっている。クラスの子達も二か月後のクリスマスにどこ行くへかの話題で盛り上がっていた。私の友達も彼氏とイルミネーションを見に行くんだと、昼食の時に自慢げに話している。

秋深き隣は何をする人ぞと詠んだのは誰だったか。先生が黒板に「奥の細道」についてチョークを叩き書いていく。自分の心に気づいたのは、ほんのつい最近。一緒に下校しはじめてから四年が経ったころだった。自分のこっちゃんへの想いに名前がついて、そしたら今隣にいるこっちゃんの気持ちも気になって。でも、そんなの。そんなの分かりっこなくて。もやもやがずっと、こっちゃんを見る目を曇らせる。目の前が曇っているのは吐息のせいだけではないだろうな。

「はい！ 今日はおしまいにします。気をつけて帰ってくださいね」

キーンコーンと響く、待ちにまった放課後の合図。さようならの挨拶。飛び交う声。そんな中、ひと際通る声
が私の耳に届いた。

「帰ろー！」

クラスの後ろのドアからこっちゃんが手を振ってくる。いつも通りの光景。いつもと少し違うのは、こっちゃんが手袋をつけているところだろうか。

「今行くー」
鞆に教科書と煩惱を押し込んで返事をする。クラスの数人にまた明日ねと声を交わし、足早にこっちゃんのところへと向かう。

下校途中にいつもの公園に寄る。先月まではブランコに二人並んでいたけど、最近はずっとベンチに座っている。この時期に夕方で、鉄の椅子は冷たすぎるから。毎年自然とそうになっていた。

私の隣で石焼き芋を二つに割ってるこっちゃん。さっき通りすがりの移動販売から買ったものだった。二人で半分ずつ、一つ分だけのお金を渡すと、おじさんは「おまけだよ」と、大きめの紙に包んでくれた。

「はい、りっちゃんの分」
「ありがと！」

綺麗に半分に分かれている焼き芋を見つめる。湯気が運ぶ良い匂い。皮をむかずに器用に中だけ頬張る。

「おいしいね」
「うん、おいしいね」

「でも寒いね」

こっちゃんが芋をふーふーしながら言う。

「ねー、寒いね」

今日は朝から冷え込んで、地球温暖化なんて嘘なんじゃないかと冷たい風が打ち付ける。太陽が出ていけば、少しはましなのだろうけど。

そんな冷え切った体に、焼き芋の温かさが沁みる。

「ねえ。こっちゃんはさ、クラスの男子とか部活の子とかと付き合ったりしないの？」

最近の下校トークテーマは恋愛が主になっていた。誰と誰が付き合ってるとか、あの子彼氏とヤツたらしいよなんて話まで。話の種は尽きなかったが、こっちゃんのことを聞いたのはこれが初めてだった。

「うん、今のところはないかな。だって、りっちゃんと帰れなくなっちゃうもん」

「あはは。それはうれしいね」

でも、こっちゃんはモテるほうだと思う。すらっとしたきれいな緋色の髪に、ほどよい低身長。その上愛嬌があって、笑顔もかわいい。

クラスでも部活でも、こっちゃんを狙っている男子がいるというひそひそ話が嫌でも聞こえてくる。

「そんなこと言ってるりっちゃんこそ、そういう人いないの？」

「いたらこうやって一緒に帰ってないでしょ」

たしかに、と二人で笑いあう。

石焼き芋の包み紙をポケットにしまい込んでまた歩き出す。

「暗くなるのも早くなってきたねー」

「ねー。普通のことなのに、つい毎年言っちゃうよね」

ふうと、一つ深呼吸。少し先を歩いたこっちゃんが振り返る。

「どしたの？ 早くいこっ」

「ねえこっちゃん？」

「んー？」

「私ね、こっちゃんが好き」

「え？」

夕陽が眩しい帰り道。耳当てしててよかった。だってしてなかったら、こっちゃんに私の赤い耳を見られてたんだから。

私の右手にはこっちゃんの左手。今年の冬はいつもよりちよつと暖かい。